

筆者が八戸藩大野村(現岩手県九戸郡洋野町)の豪農、晴山家の当主が記録した「万記録」という日記を読んでいたら、温湯(現黒石市)への湯治の記事が出てきた。巷間、津軽と南部の対立が語られるが、こと

のである。



山形温湯温泉 (津軽興隆)

大正期の温湯温泉 (青森県立郷土館所蔵)

晴山家は、大野村名主を代々勤め酒造業等を営み、藩から依頼を受け大野鉄山支配人を勤めるなど、九戸地方を代表する豪農であった。当主の吉三郎が温湯を訪れたのは文化9年(1812)8月、名主

役を引き継いで5年目、33歳の時であった。すでに19歳の時には鹿角大湯(秋田県鹿角市)、24歳の時は五戸葛湯(十和田市)、30歳の時は鶯宿(岩手県雫石町)と何度かの湯治歴があった。いずれも家族(妻や妹)や、一族にあたる商人仲間と一緒にであった。

岡にも支店があった。いずれも商売を通じたネットワークが窺える。温湯では湯元の後藤庄左衛門の貸家(現在の後藤温泉客舎の前身)に滞在し、三廻り(3週間)の湯治を行っていた。温湯は幕末には湯屋が多く立ち並び、青森・鯉ヶ沢から来た遊女がたむろして客を引く歓楽街として賑わっていた。もともと、吉三郎の日記からはそのような遊興の様子には窺えない。この間、温湯に近い板留温泉へ入浴したり、滝の不動(現中野神社。紅葉山で有名)社。紅葉山で有名

歴史に見る「温泉」⑤

庶民の湯治

晴山家の記録から

中野渡 一耕

(県民生活文化課)

県史編さんグループ 主幹

温湯へは八戸の商人仲間である村井孫右衛門ら3名と一緒にいる。七戸・野辺地・青森で1泊。野辺地では野坂勘左衛門、青森では近江屋善五郎の家に宿泊している。野坂家は八戸の豪商西町屋とも縁戚であり、野辺地町を代表する廻船問屋、近江屋は青森大町で酒造業を営んでおり、盛

や、少し離れた猿賀大明神(現猿賀神社)にも足を伸ばしている。湯治が終わっても、一行はまっすぐ大野村へ帰るのではなく、そのまま弘前に行き3日滞在、高照神社や百沢寺(現岩木山神社)などを見物している。現在も両神社には国重要文化財の社殿が残るが、吉三郎も「江

戸や京都を離れた)奥国にも拘らず、建物は目を驚かさばかりだ」と驚嘆している。その他の神社も、「南部(盛岡藩・八戸藩)には無いものである」と述べ、弘前城下の町並も「盛岡には随分劣らないように見える」と、南部領と比較しているのが興味深い。吉三郎が訪れた4年前、弘前藩は蝦夷地警備の功で10万石に昇格し、文化8年(1811)には天守を造営、藩の威信を向上させた時期だった。